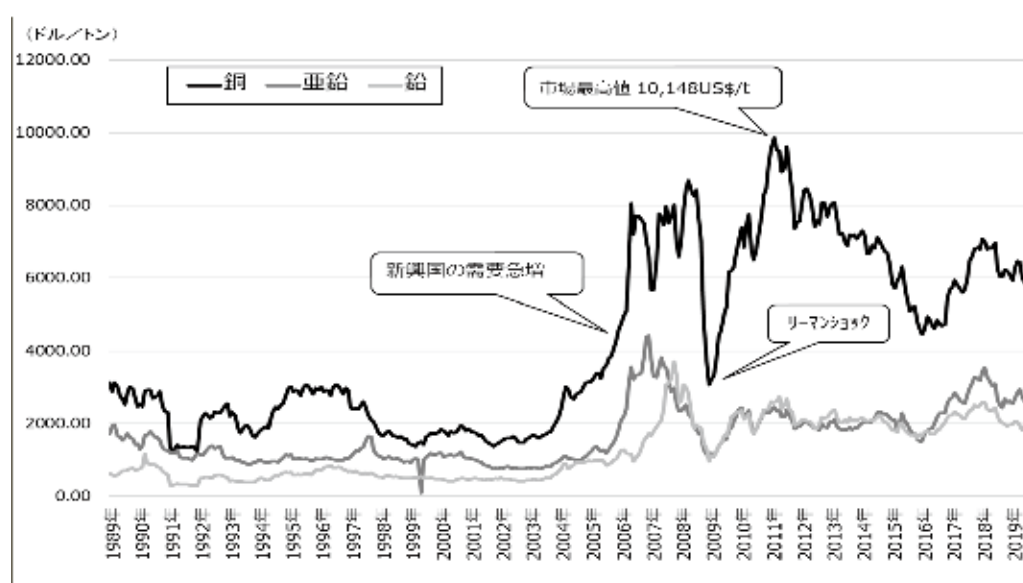


4.2. LME価格の推移

この30年間に起きた世界の需給構造の変化は、LMEにおける銅、鉛、亜鉛の国際価格の推移・変動にも顕著に表れている。特に銅はしばしば「ドクター・カッパー」と呼ばれ、銅価格は経済の先行指標と言われている。つまり、銅はインフラや住宅、自動車、家電製品等に幅広く使用される素材であるため、銅価は世界経済の動向に先行して動くと見られているからである。LME価格のグラフ(図4-2-1)を見ても銅価は、亜鉛や鉛よりも変動幅が大きいことが分かる。

銅価の推移を振り返ると、30年前の1989年のLME価格(年平均)は、約2,850ドルトン(年平均価格)だったのが、2018年では6,530ドルトンへと約2.3倍に上昇した。この間の銅価の動きとしては、まず2000年代に入るまでは、銅価は3,000ドルトンを超えることは少なかったが、2000年代に入ると中国等新興国の経済発展に伴い「資源のスーパーサイクル」とも言われる時代が到来し、2004年から2007年にかけては歴史的な価格高騰となった。しかし、2008年9月のリーマン・ショックに伴う金融危機により、同年末にかけて銅価格は暴落したものの、2009年以降は中国の景気刺激策や各国の財政政策などもあって景気底打ち感が出始め、LME等の国際価格はV字回復となった。そして、2011年1月にはLME銅価は史上初の10,000ドルトン台の高値を記録し、2011年平均でも8,828ドルトンと過去最高を記録した。

しかし、2014年以降は7,000ドルトンを割り込み、2016年1月には4,310ドルトンまで下落して底値を打った。その後回復基調ではあったが、足元では米中貿易戦争による中国経済の減速や先行きの需要減退の懸念から6,000ドルトンを下回る水準となっている。



(出典)WBMS

図4-2-1 銅、亜鉛、鉛の国際価格の推移 (LME)